

第64回区民車座集会意見交換内容（川崎区）

- 1 開催日時 令和6年2月3日（土） 午前10時00分から午前11時56分まで
- 2 場 所 東海道かわさき宿交流館4階第1・2集会室
- 3 参加者等 参加者15名、傍聴者約14名 計29名

<開会>

司会：大変お待たせいたしました。定刻となりましたので、ただいまから第64回車座集会を開会いたします。私は、本日の司会を務めます川崎区役所企画課長の成沢と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

本日の車座集会は、「これからの東海道川崎宿を活用したまちづくり」をテーマに、企業、団体、町内会、自治会の皆様方と市長とで意見交換を行っていただく内容となっております。

それでは、初めに、行政からの出席者を紹介いたします。福田紀彦川崎市長でございます。

市長：おはようございます。よろしくお願いいたします。

司会：中山健一川崎区長でございます。

区長：おはようございます。よろしくお願いいたします。

司会：それでは、初めに、福田市長から一言ご挨拶申し上げます。

<市長挨拶>

市長：改めまして、皆さん、おはようございます。

第64回になりました。車座集会に土曜日の貴重なお時間をいただきまして、本当にありがとうございます。

車座集会というのは、地域の課題になっているものをどうやってみんなで解決していこうかということについて知恵を出していく会が多いんですけども、今回の場合は課題ではないかなと。課題というよりも、これから新しい楽しさを作り上げていこうみたいな、そういう話なので、昨年の川崎宿の400年を受けて、これからもう少し発展的にどうしていくのかということ、わくわくしながら具体的に話を進めていければいいなと思っております。

今日はすばらしい関係者の皆様にお集まりいただきましたので、何か生まれるといいなと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

司会：ありがとうございました。

それでは、次に本日の進め方についてご説明いたします。

初めに、今日ご参加の皆様、それぞれ1分ぐらいで自己紹介をお願いしたいと思います。次に、川崎区長より本日のテーマについてお話しさせていただき、その後、福田市長をファシリテーターとする意見交換に移りたいと思います。

では、お名前とご所属のほか、1分と短い時間ではございますが、私から見て右手の方、木村様から何か一言ずついただければと思います。よろしくお願いいたします。

<自己紹介>

木村さん：皆さんおはようございます。参加者名簿の一番上に書いていただいています、川崎駅広域商店街連合会の理事と、それから東田商店街の副理事長で、市役所前で不動産業を営んでおります川崎中央プランナーの木村でございます。よろしくお願いいたします。

鬼塚さん：どうも、皆さん、おはようございます。私、東海道川崎宿400年のプロジェクト推進会議の会長を務めております鬼塚と申します。よろしくお願いいたします。

川崎育ちで、現在チネチッタ商店街、あそこの近くで中華料理屋をやっております。それで、何と言いましても、川崎は私の育ったふるさとで、大変大好きな都市なので、これからも東海道にかけて、いろいろ広げて川崎をPRしていきたいなと思っております。

白熊さん：おはようございます。このメンバーの中では地元の町会長、すぐ隣の町会長をやっております白熊と申します。

家業は、昔は下駄屋でした。私で4代目。ここにいらっしゃる岩澤さんなんかと同じように、本当の地元でずっと育って、それでやってきました。

鬼塚さんとは今、町内会のことで本当にお手伝いをさせていただいて、あと、もう50年以上たっていますけれども、地元の青年会というのがありまして、初代の会長が亡くなったものですから、2代目の会長をずっとやっていました。

今日配られたパンフレットの中に、「みこしだこ」という品川のご紹介なんかもありますけれども、品川ももう何回も行っていきますので、よく存じ上げています。

今日、市長さんをお話で、いろんなこと、脱線するようなお話もしちゃうかもしれませんが、そこはもう本当にご勘弁いただきたいなと思ひまして、よろしくお願いいたします。

元沢さん：おはようございます。プロバスケットボールクラブの川崎ブレイブサンダース取締役会長の元沢でございます。あと併せて、川崎ブレイブサンダースの親会社に当たりますDeNAという会社で、今年、2028年に開業予定の「川崎新！アリーナシティ・プロジェクト」の責任者をしております。

今日、こういった貴重な場にお招きいただきまして、本当にありがとうございます。まさに皆さんのご意見を聞きながら、学ばせていただきながら、ぜひまちとともに成長できるアリーナ、市民の皆さんにとっても本当に誇りに思ってもらえるようなアリーナを造っていけたらなというふうに思っておりますので、今日は頑張って勉強してまいります。今どうぞよろしくお願いいたします。

まつ乃家さん：皆さん、おはようございます。芸者置屋まつ乃家の女将をしております、まつ乃家の栄太郎と申します。

初めてお会いする方もいらっしゃると思いますが、私は地元で芸者置屋を長年、先代からさせていただいております。この川崎にも昔はもちろん芸者衆などもいたと思っております。お話もたくさん聞かせていただいておりますが、今、私もコロナ禍を越えて、芸者の文化を日本だけではなく、海外にもたくさん発信している次第でございます。

この芸者文化を通して、日本文化、茶道や習字など、いろんな文化があるので、そういったものを掘り起こしながら、インバウンドに向けて川崎のために何か役に立てればなと思っております。今回この車座に参加させていただいて、いろんな意見を拝聴させていただきまして、参考にさせていただきながら、私も何か発信できればと思っておりますので、ぜひともお力をお借りできればと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

岩澤さん：皆さん、おはようございます。株式会社岩田屋の岩澤と申します。

うちはこの通り、ここと同じ本町1丁目でガラス屋から始まった会社で、今年でちょうど130年になります。今はその空き倉庫を利用して、ビール工場、あと通り沿いで切り子の教室と、去年の12月に陶芸教室も始めました。自分の仕事で、地域に何か役に立つことができれば良いなと思って行動しています。今日は勉強させていただければと思いますので、よろしくお願いします。

山根さん：皆さん、おはようございます。株式会社山根工務店の山根と申します。

私どもの会社は、その本町2丁目で工務店を営んでおりまして、今年で創業122年を迎えます。川崎市制は今年で100周年ですけれども、その前からスタートして、この川崎のまちをつくってきたという自負もございます。

小さな会社ではありますが、本日は、つくり手の立場として、まちづくりにどう寄与できるかということを念頭に置きながら、お話しさせていただければなと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

吉岡さん：おはようございます。ホテル縁道の吉岡と申します。隣にいらっしゃる山根社長がオーナーのホテルになります。

ホテル縁道は2020年にオープンしたんですけれども、東海道から稲毛神社に向かう参道の前にあったということで、東海道川崎宿というコンセプトをつけさせていただいております。

私、川崎出身じゃないんですけど、2015年に川崎に来たのがきっかけでして、そのときも小川町の東海道沿いのホテルで鬼塚会長にもお世話になりました。

気がついたら、今、川崎区民になっているという状況なんですけれども、まだまだ川崎の強み、あと東海道の歴史の強み、まだ知らないことがいっぱいあると思いますので、今日はいろいろ勉強させていただいて、ほかのホテルさんも今日はご一緒なので、いろいろ連携しながら、川崎を盛り上げていければと思っております。よろしくお願いいたします。

齋藤さん：皆さん、おはようございます。2月9日に開業予定のSAKE Kura Hotel川崎宿の支配人を務めさせていただきます齋藤と申します。

当施設は東海道川崎宿と三角おむすび、グループ会社の吉川醸造で作った日本酒の3つをコンセプトに、ゆっくりくつろげる空間を目指しております。川崎宿をコンセプトにした当施設といたしましては、地域の皆さんと一緒に川崎を盛り上げていけるように、運営を目指しております。どうぞよろしくお願いいたします。

豊田さん：皆様、こんにちは。よろしくお願いします。ホテルメトロポリタン川崎の広報を担当しております豊田と申します。

私ども2020年に開業いたしまして、3年がたったところでございます。海外のお客様もかなり増えてきたというところで、川崎宿400年の広報プロジェクトにも参加をさせていただいていましたので、ぜひ今回は、広報という立場でいろいろと皆様と一緒に考えていきたいと思っております。どうぞよろしくお願いします。

佐々木さん：こんにちは。京急電鉄の佐々木と申します。

この会場にいらっしゃる方にはいつも本当に大変にお世話になっておりまして、どうもありがとうございます。

私は今、新しい価値共創室という、新しくできた部署にいて、何をやっているのかよく分からない部署名と言われるところではあるんですけども、これまで、主にエリアマネジメント、地域連携と、あとMa a Sという移動を便利にするサービスの整備をやってきたんですけど、いろんなところに首を突っ込んでいるうちに、去年新しい部署ができて、今は会社の事業戦略をつくったり、新規事業を担当したり、主に建物を建てたりする以外のことをやっています。

今「COCOON Project (コクーンプロジェクト)」、「川崎COCOON」ということで、いろいろな地域連携の取組を行っているんですけど、一番大事にしていることは、京急が何かやるということもあるかもしれないんですけど、そんなことをしなくても地域で面白い活動とか、地元のことを大好きで活動されている方が本当にたくさんいらっしゃるというふうに感じておまして、そういった方々と一緒に1つのものとして重なる部分を発信をしていくだけで、新しい価値が生まれるんじゃないかなということを考えて、エリアマネジメントということに取り組んでおります。

川崎は126年前の創業の地ですが、川崎大師があるだけ、今まではそういう語り口で言われることが多かったんですけども、本当に福田市長の下、人もすごく増えておりますし、新しいまちができて、それこそ先ほどのアーリーナの件もございますので、京急の沿線の中でも中心になってくるまちになると確信しております。今日はそのまちを一緒につくっていく方々とお知り合いになればいいなと思って参りました。どうぞよろしく願いいたします。

嵯峨野さん：おはようございます。川崎信用金庫、業務部の嵯峨野と申します。常日頃、私ども川崎信用金庫をご愛顧いただきまして、誠にありがとうございます。

私ども、東海道沿いに、皆さんももう見いただいているかと思っておりますけれども、本店のシャッター11面に浮世絵のデザインの掲出をさせていただいております。2014年7月に除幕式が行われ、ちょうど今年の7月で10年を迎える節目となっております。東海道のシンボルとして皆様に、今後も愛されるようなものになっていけばいいかと思っておりますし、また、この会を通じて、私ども金融の面というところにはなりますけれども、皆様のご意見をいろいろ賜りながら、できること、尽力していきたいと考えておりますので、何とぞよろしく願いしたいと思っております。

濱館さん：おはようございます。東海道かわさき宿交流館、副館長の濱館と申します。よろしく願いします。

この交流館、昨年10月でちょうど10周年を迎えまして、それと併せて川崎宿起立400年事業、一緒になって地域の方と展開していきまして、本当にすばらしい中間灯ができるなど、非常にうれしく思っています。この交流館を使っただいて、皆さんとまちづくりを進めていけたらなというふうに思っておりますので、今日は一緒になって勉強したいと思っております。よろしく願いします。

中村さん：皆様、こんにちは。私は黄色い服を着て目立っていますけれども、川崎歴史ガイド協会の中村と申します。

私たちガイド協会は、ちょうど25年前、区役所の地域振興課の講座で勉強会を始め、24年活動しております。主に、大師道、平間寺、稲毛神社、川崎東海道周辺ですね。私が一番大好きなのは子どもたちへのガイドなんです。自分のまちを知る、そういう意味で子どもとともに、まちを知りながら成長させていただいております。今日のこの集いで、また新たな勉強、また面として広がる川崎、それを今考えたいと思っております。今日はよろしく願いいたします。

和田さん：こんにちは。隣の品川宿、長い名前なんですけれども、旧東海道品川宿周辺まちづくり協議会、こちらの事務局をやっている和田と申します。

品川宿の人間は、まちから出ると怖くてしょうがないので、ちょっと私も今、早く品川宿に帰りたい気持ちでいっぱいではありますが、今日は品川宿のまちづくりの取組が少しでも皆様のエッセンスになればいいなと思っております。

あともう1つ加えて、昨年は第35回東海道シンポジウム川崎宿大会を盛大に執り行っていただき、私どものまちづくり協議会の会長、そしてNPO法人歴史の道の会長をやっている堀江に代わりまして、お礼を申し上げたいと思います。

今日は多分、まちづくりの話となると広がったり脱線したりがあるとは思いますが、皆様と一緒にお話できたらと思います。よろしく願いいたします。

<テーマに関する説明>

司会：皆様、ありがとうございます。

それでは、まず川崎区長から、本日の車座集会のテーマについてご説明いたします。よろしく願いいたします。

区長：それでは、これからちょっと着座で。皆様も着座をお願いできればと思っています。私のから今日のテーマということですが、どちらかというと、これからの川崎宿を活かしたまちづくりへの私の思いといいますか、そのようなことでお聞きいただければということで、少しお話をさせていただければと思います。

先ほどもありましたけれども、昨年2023年、川崎宿はできてから400年を迎え、節目の年になりました。今日も参加いただいています400年のプロジェクトの会議の方々を中心に、本当に多くの方に参加をいただいて、シンポジウムですとか、様々なイベントを開催することができました。

そして、今年、年が明けて401年になりますけれども、これからこのまちづくりをどうしていくかということで、私としては当然これまでの取組を活かしながら継承しつつ、もっともっとさらに、新しい取組がどんどん生まれてきて、そして、そういった取組が成長して、この地域に根づいていくという、そんなような形になっていければいいかなと考えています。

これまで区のほうで事務局をして川崎宿の地域資源を活かして取り組んできておりますけれども、さらにこの街道筋だけではなくて、川崎駅周辺ですとか、もっとほかのエリアにもこういった取組をぜひ広げていきたいなというふうに考えています。

そういった意味で、どうやってこれから取り組んでいけばいいかということで、私が感じているのは、区が事務局という形、スタイルではなくて、本当に地域の皆さんがいろんな興味のあることや、やりたいこと、そういったことに力を発揮できるような、そんな形ができるといいなというふうに考えています。

皆さんご承知のようにこの川崎駅周辺、コロナ禍であっても、いろんな意味で新しい取組、民間主体であったりとか、地域のそれぞれの団体の皆さん方のいろんな取組であったりが始まってきている、本当に活気のあるまちだと思っています。

これからの区役所は、そういった取組だったり、人だったりをぜひつないでいて、もっと広くいろんな人を楽しんでいただけるような、そんなまちづくりに取り組んでいきたいと考えております。そういった取組が続くことによって、いい循環が生まれて、本当にこの川崎はもっともっと魅力があって活気のある元気なまちになっていくんじゃないかなと思っています。

今日は、ぜひ地域が主体になって、様々な取組がどうやって生まれて、そして成長して、どう根づい

ていけるかという、そのようなことについて、皆さんと一緒に意見交換させていただければと思っていますので、どうぞよろしく願いいたします。私からは以上になります。

司会：ありがとうございました。

では、ここからの進行は福田市長になります。どうぞよろしく願いいたします。

<意見交換①>

市長：改めまして、よろしく願いいたします。

自己紹介をしていただいただけで、本当に多彩なメンバーがよくこれだけ集まっていたのだなと思っておりますけども、まずは、和田さん、ここは川崎ですけど、品川宿から今日は来ていただいています。川崎の取組は20年ぐらい前から、鬼塚会長をはじめ、いろんな人たちが400年を祝おうという取組が始まりましたけれども、その前からずっと、品川宿を活かしたまちづくりを進めておられます和田さんをはじめ、堀江会長も含めて、いろんな取組をされておりますので、参考までに、まずご紹介をいただければと思います。よろしいでしょうか。

和田さん：改めまして、旧東海道品川宿周辺まちづくり協議会、ちょっと長いので、今後、まちづくり協議会と言わせていただきます。まちづくり協議会の和田と申します。簡単にですが、自己紹介ですけど、私は品川生まれ、品川育ち、品川宿のすぐ近くに住んでいます。大学卒業後はやはり私も、自分の地元を離れる形でおりましたけれども、40歳ぐらいでちょうど震災があり、母の介護なんかも入ってきたりして、ちょうど10年、15年ぐらい前に品川宿に戻ったのがきっかけで、まちづくり協議会とご縁があり、今は協議会の事務局をやっております。

まちづくり協議会の成り立ちというか、発足なんですけれども、昭和63年設立とありますが、63年といえば、私はあまり接していないんですけど、バブル期だったかと思うんですけども、区も比較的金ももあり、区の中でも、荏原や武蔵小山の辺りというのは、もう既に私たちよりも先に、結構まちづくり活動みたいなものを盛んにやっていました。

品川宿のメンバーは祭りさえできていればオーケーみたいなところがあるもので、のほほんとしていたそうです。そんな中で、逆に区のほうから、ほかの地域もこれだけやっているのだから、品川区エリアも何かやってみたらどうだというお声かけがあり、とはいえ、言われたのはいいものの、我々は何やったらいいか分からないといったところで、お話が来たのが、昨年、第35回のシンポジウムをやっていたと思いますけれども、第1回目が土山宿で東海道シンポジウムがありました。これのお声かけがあって、じゃあ、行ってみようじゃないかということで、そのときは区、町会、商店街、我々の品川宿周辺のメンバーがかなり大人数でバスで行ったそうです。そこで初めて、東海道品川宿という資産、資源、宝、歴史、文化が自分のまちにあるということに気づいたのが、この63年で、これを活かさなきゃいけないねということで設立となりました。

まずスタートしたのが、おそらく今の我々がとても大事にしている、月例でやっている運営委員会の走りになるんですが、車座じゃないですけども、みんなが集まって週に1回、話をするという会があったそうです。

月のうちの3週、毎週1回みんなが集まって話をする。だけど、夢の話をしたり、こんなことやりたいねと言っていたりだと、なかなか話がまとまらないので、ここで初めてコーディネーターさんが外部から入りました。その方は今でもいて、昨年、これまでの我々の34年の活動の歴史を1冊の本にまとめてくれた方でもあるんですけど、佐山さんが入ってくれたことにより、それまではその場の話でしかなかったものが、1個ずつまとまっていくようになりました。

その話し合いの中でも、堀江会長のお話の中で、月のうち3週は自分たちで話をする、夢を語ったりいろんな話をしたりして、4週目に区の方が来てくれていたそうです。当時、課長クラスの方々、各部署の人たちがその場に来てくれ、自分たちのやりたい、こんな課題がある、そういうことを区にぶつければ、その場で反応があるので、とても速いスピードで自分たちも理解ができたし、いろいろな話を進められることができたということは言っていました。

今度、それを形にしたのが私たちのバイブルにもなっているんですけども、この東海道品川宿周辺まちづくり計画書、これは品川区の基本構想を基に、自分たちがやりたいこと、この中からできることを、たしか、まず最初にワークショップみたいなものを行って、自分たちのまちの宝探し、こんなところがとてもすてきだよねと、でも、ここがもっとこんなふうになったらいいよねと、そういうことを出したものを基に、それと品川区の構想を足し算して、自分たちのまちづくり計画書を作りました。これが平成7年のこのまちづくり計画書の策定ということになっていきます。

その後、大分空いて、21年に交流館の設立になるんですけども、今はもう商店街が5つなんですけれども、当時は8つの商店街と30の自治体と40近い企業なんか、まちづくり協議会の組織の構成員となっています。

その中に区だったり、顧問として副区長さんが入ってくれたり、自治体、町会の地域センターなんかが入ってくれたりという形で、結構、まち全員の総意が入っている形の協議会になっています。ただ、あくまでもこれは名前のおとおり、事業体でもNPOでもなく、協議体です。だから皆さんがここに集まり、いろんな話をして、前に進んでいく。ただそれだけ。これは35年間の活動の中で、本当にコロナで何回か立ち切れた以外は、一度も欠かしたことの無い月に1回の協議会というのがずっと行われてきています。

35年間ずっと我々がテーマにしていることが、歴史や文化を守りながらこのまちで何かをしようとしている人たちを応援する。それを基本にみんなで毎月の会議をしながら、話がまとまれば、そこへつながっていく。何かほかへ紹介できることがあれば紹介していくみたいな、本当にふわっとした協議の場が行われています。

そうですね、これが運営委員会ですね。ちょっとすみません、1つ前のところで申し訳ないです。

先ほど話をした、このまちづくり計画書の中には、本当に多くのハード整備の部分、電柱の地中化であったり、道路整備だったり景観まちづくりも関わってくるんですけども、まちのサイン化、あとファサードだったり、ハード整備の部分の計画を立てるに当たり、やっぱり区との連動というのは絶対欠かせないものだったので、これを策定するときにはかなり区の方に並走していただきながら、この企画書を作って、なかなか民だけではできないことでありますので、本当に行政と私たち、まちづくり協議会がずっと並走しながら、これをつくり、1つ1つ実行して行って、今年で35年、丸36年目の活動に入りますけど、この計画書はほぼ実行し終わっています。

これからはもう本当に若い人たちをどんどん取り入れて、ソフトの時代に入っていきたいねと言っている状態です。

その中で7つのプロジェクトというのは、ずっと少しずつ積み上げながらできてきているものなんですけれども、一番のお休み処というところは、品川宿交流館というところと、もう1つ、昨年、国の登録文化財になった古い交番を使ったまちなか観光案内所と、2つを品川区の観光課から業務委託を受けて、まちづくり協議会で運営管理を行っております。

まちなみ整備も、こちらは品川区の都市計画、景観課のほうから委託を受けて、私たち景観アドバイザーというものをまちづくり協議会から輩出して、まちの中に新築や改築、増築なんかがある場合は、必ず届出を出す。その際に、私たちが窓口に入り、窓口の中で、「このまちはこういうふうに、景観法によって整備をされています、ご協力ください。ご協力に当たって区と東京都のほうから補助金が出ま

す。まちに対しての協力をしてくれれば補助金が出るので、どうぞこれを使いながらまちに貢献してもらえませんか」という活動をしているのが、このまちなみ整備です。

あと文化、スポーツなんかは、一昨年のオリパラの際に品川区に関しては、ホッケー場とブラインドサッカーとか幾つかのスポーツ関係のものもあるので、ここも割と組んでやっていたりはしています。

現在、結構熱いのが水辺です。品川区は水辺に接している東京都の中でも結構貴重なエリアなので、水辺の観光であったりとか、活用というのも、今やっぱり行政なんかと一緒に連動しながら、動いています。

私は事務局をやりながら、3番目のまちの広報部という形で、お手元にある、この「みこしだこ」を必ず年に2回発行して、会員の皆さんに自分たちの活動の報告、あとは自分たちの活動のPRをしながら、仲間をどんどん増やしていく。もしくはその仲間たちを外に広報していくという活動もしています。

この辺は、何となく読んでいただいて。ここはもうずっと30年の間、大事にしている、恐らくモットーで、一番最後のこの「どなたもウェルカム、どんな提案もオーケー、全てオープン」というのが、まちづくり協議会の本当にずっと大事にしてきていることですね。

この入り口があったので、私は10年ぐらいまちづくり協議会に関わっているんですけども、私自身がまちづくり協議会に関わり出したのも、運営委員会に出席したことが、きっかけではありました。

地元の人間なので、まちの中で何かスタートしたいと思ったときに、たまたま、まちの同級生に声をかけたら、自分たちの地元にはこういうものがあるよ、この協議会がやっている運営委員会に顔を出してみたらというのがきっかけでした。ここに行ったら堀江さんがいて、当時もやっぱり毎回30人ぐらいが集まっていたんですけど、その中で自分はこういう者です、地元の人間ですと言うと、よく来たねみたいな形になり、何をやりたいのなんて言って話をすると、何でもいいね、いいねと言ってくれるから、こっちは気分がよくなってきて、いいところだなと、やっぱり地元は最高だなと思いながら回を重ねていくようになり、支えてくれる場所と、地域と人がいるという安心感の中で自分もまちの中に入って行って、自分もここで生まれ育ったご縁を何か返していきたいなという思いにもなるようになって。品川宿交流館というところが事務所になっているので、そこに通うようになり、ちょっと椅子だけ貸してと言いながら、そこを仕事場にしながら、まちづくりに関わっていくという。

居れば居たで、交流会には人が集まってくるので、またそういう人たちとお話しして、それは楽しいね、いいねという話を順繰り循環しながら、何かしていくというのが、楽しくなっていくうちに事務局に入るようになって、今10年目を迎えているという感じです。

交流館は、もともとはまちの洋服屋さんだったのかな、ミカドという洋服屋さんだったところを、品川区さんが借りとってくれて、ここを交流館として使いました。

月に1回の月例の運営委員会をはじめ、基本的にはオープンにしていますので、地元の人たちがここを借りて、何かワークショップをやったりとか。川崎宿さんもかなり立派なところがあるとは思いますが、同じように、基本的には誰でも使える形にしています。

平成21年にここができて、まちづくり協議会としては毎月の月例の運営委員会はずっとやってきましたけど、どうしても特定の方だけが集まっているような場にはなってしまうところに、交流館ができたことで場がオープンになり、誰が来てもまちづくり協議会の話をしたり、こんな人に会ってみたらというコーディネーション的な役割をできるようになったという。まちづくり協議会としての変化はすごく大きかったと思います。

ここに来れば何かをやってくれる、協力してくれる、何かが生まれると思っている方々が結構集まってきて、当時、私よりもちょっと若い、彼は多分川崎市民なのかな、彼がここに常勤していたということで、じゃあ、運営委員会が次あるからおいでよとなる。運営委員会で話す。「いいね」が始まり、

また気分よくなって仲間になる。この循環を繰り返しながら、いろんな人が出たり入ったりしながら、まちがずっと活性している状態というのは、この交流館と運営委員会という月に1回の会議が、まちづくり協議会の中の礎でもあり、発展していくものの場にはなっています。

「みこしだこ」なんかに書いていますけれども、本当に多くの方々がまちの仲間としています。これは別にまちづくり協議会がつくったものではありません。もともとそれぞれ活動している皆さんが自分たちの思いとか、やっていることを持ち寄り、共有していくことで、まち全体が仲間として存在しています。自分たちがやっていることをほかの人と連動することもあれば、自分たちがやっていることを誰かにお願いしたいとかだと、必ず大体まちづくり協議会の運営委員会に来て、共有して、あそこつながりたい、自分はこういうことやりたいということを発表し、つながっていくという形で、まちの仲間がどんどん増えているという感じです。

まちづくり協議会自体の評価としては、私は10年ぐらいここにいるだけではありますけれども、任意団体となっているので、まちづくり協議会が事業を生み出しているかという点、そういうことはなくて、行政から委託を受けているものという意味では、運営の形ではお金はもらってはいますけれども、まちづくり協議会の事業形態としては、年に1回、私たちのこの活動に対して賛同してくれる方々を募っており、それはもうイコールまちの仲間なので、皆さんから会費をもらっている。それが1年間の活動経費になっています。なので、事業がベースになっているというよりは、自分たちのまちが好きでいられる、遊んでいられるまちづくりというものをずっとやっていく中で、その中で事業性みたいなものというのは副産物であったり、2次的、3次的なものであったりという感覚は、まちづくり協議会の在り方なのかなという意味で、ものすごく説明が難しい。よく、このように皆さんから事例のお話があったりして、まち協の話はするんですけども、決して事業でもなく、超大きなボランティア団体で、中間支援、コーディネーションというか、仕組みも何もなくて、人が仕組みです。

まず、堀江さんという人格があり、堀江さんを基にできている町会や商店街の人脈があり、その中に私たちは堀江チルドレンと言っているんですけど、まちの中の意思、何か誇りみたいなものが伝わっている人間がまたその下について、そこが、お互い何かうまくやりながら次の人たちを迎え入れて、まちへまた返していくみたいな循環している感じぐらいには、そういうすごくぼやとした雰囲気はまちづくり協議会です。

だから答えもないですし、これまでの35年の歩みが正しかったかどうか、きっと堀江会長から言わせれば分からないと思います。堀江会長は、30代の頃からまちづくり協議会の会長をされていますが、ずっと大きなスーパーをやっていたりしていたので、当初のスタートラインは、恐らく事業の活性を考えていたと思います。

ただ、私は10年ぐらいお付き合いをしていく中で、堀江さんは自分の会社、自分の事業をよくするためとかいうことは、一度も口にされたことは本当になくて、やはりまちがよくなってこそその経済、暮らしがよくなってこそその経済という理念があるので、それは多分みんなにも伝わっていて、何かそういうところはあります。そんな感じですかね。なので、私たちの役割としては、活動をつなぐ、人をつなぐ、コーディネーションというか、本当、そういう役割が私たちがやっているまちづくりであり、結果、まちがよくなっていくと思って、活動はしています。

よろしいでしょうか。ご清聴ありがとうございます。

市長：和田さん、ありがとうございました。すばらしい取組ですね。

毎月1回みんなで集まってわちゃわちゃやると。非常にオープンで誰でも参加が可能で、こういうことをやりたいんだけどと言われれば、「いいね、いいね」と。そこでつながり、コーディネーションが行われて、協議会自体が何か事業を行うというよりも、それを何かつないで、事業化のお手伝いをして

くれるというような、そんな感じですかね。ありがとうございます。

それでは、今、和田さんにすてきなお話をいただきましたけども、ここから、これまでやってきたこと、あるいはこれからやっていきたいことというものが、それぞれ皆さんあると思いますので、共有していただければと思うんですけれども、まずは400年のプロジェクトの推進会議の会長をしていただいております鬼塚会長に、400年のプロジェクトのことも振り返りながら、これからどういうことをやっていきたいかというようなことをご発言いただけますでしょうか。

鬼塚さん：昨年はちょうど、東海道川崎宿起立400年ということで冠があつて、盛り上げようということで、それ以前を考えますと、私は小学校のときから、東海道を歩きながら学校に通っていたんですね。でも、まるっきり東海道を忘れていました、ある時期まで。いろいろ団体ができて、スタンプラリーだ何だどできるようになって意識するようになり、それで起立400年に向けてというプロジェクトができたときに、ああ、これはやっぱり、私自身が忘れていたというのは、大変なことだと。

また、ここ何年か移住してきた人もかなり川崎区は多いんですね。それで、東海道をまるっきり知らない、そういう経緯もあり、また我々の年代と若手とやっぱり入れ替わる時期でもあるということで、東海道をちょっと忘れていたというわけではないんですが、確かにちょっと薄れていた時期がありました。

この400年をきっかけに、いろいろプロジェクトをつくるに当たり、やはり地元の人が集まってきて、できた。これは各町会長、商店街、いろいろな方が集まってきてくれたわけですが、非常に心強かったです。

それで、さて何をやろうか。まず、東海道なんですけど、それを面に広げて川崎をアピールしていこうという趣旨を、やっぱり頭に持ってきて、東海道を使って川崎を発信すると。東海道というと、この周辺では大師ですとか、昔ながらの名所がございます。そういうものを掘り起こして、これから先また、川崎は伸び代がまだいろいろありまして、商業エリアでもありますけれども、臨海部の方もどんどんこれから広がっていけばいいなと思っています。

また、先ほどもちらっと出ましたが、外国のお客さんも、羽田とアクセスがすごくいいということで観光客も増えています。だから、いろいろな意味で川崎はすばらしい地域だなと思っています。

市長もこの間、多摩川のイベントのときに来ていただき、多摩川が一時よりすごくきれいになったのに、私も驚いた。昔は泳げたぐらいきれいだったんですが、一時下水の問題で川も汚れてという時期がありましたけど、ここ20年ぐらいですかね、だんだんきれいになってきて、本当にきれいなのでびっくりしました。川もある、それで臨海部はどんどん広がっていく、住民も増えている。そうすると何でもやりやすいというか、そういう意味でいろんな意味で伸び代があるんじゃないかなと思っています。

私は今、広域商店街連合会の会長もやっていますが、商業が中心で活気が出ると、まち全体に元気が出てきますね。そうすると、住む人も元気が出るんじゃないかなと。そういう意味では商業でも、頑張っていかなきゃいけない。

川崎は東京、横浜の狭間にあるということで、何か下に見られているようですけど、逆に見ればそうじゃないですよ。我々はもう、東京、横浜と肩を並べるじゃないですけども、そのぐらいにもう、戦後78年ですか、経っていますけど、すごくパワーのある市だなと思います。そんな感じで考えております。

市長：ありがとうございます。鬼塚会長に引っ張っていただいて400年のところで改めて、会長からもお話があったとおり、東海道川崎宿があまりうまく伝わっていなかった時期もあったけど、この20年間でいろんなプロジェクトを組んでいただいたことによって、再発見されてきたという、その途上に今あ

るのではないかなど。昨年ピークを持っていったいただけたけれども、さらにどういうふうに広がっていくのかというのは、今お話があったように、東海道川崎宿ということもあるし、川というコンテンツもあれば、いろんな広がりがあるよねということをお願いしたいと思っています。

それでは皆さん、自分はこういうことをやりたいとか、あるいはやろうとしているというようなことについてコメントをいただければと思いますが、いかがでしょうか。どなたからでも結構ですが。

豊田さん、いかがですか。実はインバウンドの話聞いて、何とこの前、支配人から、神奈川県内で最もインバウンドが入っているホテルになったというお話を聞いたんですけども。

豊田さん：そうですね。おかげさまで海外の方が非常に増えてきてまして、我々は本当にコロナのときに何もできないという状況が非常に長かったということもありましたが、来てくださったお客様がどんどん口コミで広げてくださったというのがありまして、それでお客様がお客様をつないで、今の現状に至っているというところがあります。

それをベースに、今我々のホテルとしてやりたいというか、やろうとしていることとしては、3月の末になるんですが、今、（鬼塚）会長がおっしゃったように、川崎を拠点に動くのにも非常に便利なまちですし、あとは来てみたら非常に楽しいまちだということで、そこをしっかりと海外のお客様を含めて、国内のお客様にもPRしていきたいと思っております。観光情報というテーマでいろいろとあちこちの取材をさせていただいております。先日は、東海道ビールさんも取材をさせていただいたりしまして、体験できることも含めて、我々としてPRしていきたいと思っております。

最終的には川崎のまちにどんどん来てほしいというところが目標になっておりますので、そういったところを目標に、どんどん川崎のまちをホテルからもPRしていきたいと思っております。

市長：ありがとうございます。羽田空港から京急に乗って13分という、京急の佐々木さん、いかがですか。

佐々木さん：ありがとうございます。

県内1位ですか、すごいですね。さっきもちょっと質問させていただいて、まさに我々もやりたいことはいっぱいあるんですけど、その中でも1つという、やっぱりインバウンドにすごく力を入れていて、タスクフォースみたいなものを去年やったりして、何ができるか知恵を出しています。

実際、川崎市、川崎区さんともこの間インバウンドのプログラムをつくられたという話を伺ってまして、それをちょっと一緒に我々もやらせていただけないかなんて話もありまして、羽田での情報発信とか、先ほど観光情報を集められているというお話があったので、ぜひ一緒に羽田で情報発信をして川崎に来てもらうとか、今日はそういう連携をつくれるといいなと思っております。

我々も、前のインバウンド、コロナの前のは、非常に力不足だなというふうに思っていて、何をやってたかという、羽田から来るお客様にとにかく皆さんが目指すスカイツリーとか、都内に行く交通手段として京急を選んでもらうというところから始めようとしていたんですね。そうじゃなくて、最終的には京急沿線に観光の拠点があって、そこを目指して来ていただくというのを、せっかく羽田を持っている中でやっていきたいなと思っております。振り返ってみると、やっぱり川崎、品川、三浦半島とか、非常に魅力がある場所が多いというところなんです。

去年、タスクフォースで話していたのは、例えば乗換えのお客様とか、3時間時間が余るとか、そういう方が回るときに、実際にちょっと買物できる場所はないのという問合せが駅にもすごくあるということで、今川崎のビックカメラさんとかをご案内しているというのは聞いていて、であれば、3時間あればそれこそ東海道のこういう拠点をさせていただくとか、あとは川崎大師で日本らしい体験をすることもできると思うので、そういう常設で売れるようなプログラムをつくって、まずは3時間遊んでいけ

る身近な楽しいまちというところをつくって、我々も商品として一緒に売っていけないかと。

それが伸びると多分三浦半島まで半日とか、最後の1泊で来てもらえるかなというのがあるので、ちょっとそんなことやっていきたいと思っております、さっきも申し上げたとおり、我々だけではコンテンツをつくるというのは力不足ですので、本当、今日ご参加いただいている皆さんともいろんなお話をさせていただいておりますので、ぜひ日本らしいプログラムを一緒につくるといいなと思っております、後で具体的な打合せをさせていただきたいなと思っております。よろしくお願ひします。

市長:ありがとうございます。3時間の短時間というのも川崎は取り込みやすいというところでありまして、メトロポリタンさんは、結構外国人のお客様、長期間泊まれる方が多いと聞いていますよね。1週間とか10日という方もいらっしゃる。ちょっとお話いただけますか。

豊田さん:はい。1週間、10日の方もいらっしゃいますし、もっと長い方もいらっしゃいます。

市長:ですから、しっかりと地元のコンテンツというのをつくっていくというと、ものすごく大きな活性化になるなど。割合を聞いたら外国人の方が60%を超えていると……。

豊田さん:月によってなんですけれども、そうですね。月平均で60%を超えているような月もあります。

市長:驚くべき数字じゃないですか。「YOUは何しに川崎に」という感じですけど。

栄太郎さんにちょっとお伺いしたいんですけど、日本の文化を、国内もそうだけれども海外にしっかりとアピールしていくということを、栄太郎さんはやっておられますけれども、今やりたい、あるいはこれからやっていきたいということについて、コメントをいただいてもいいですか。

まつ乃家さん:そうですね、私たちもコロナ前は海外、インバウンドに関しては、やりたくないなというふうに思っていて、日本固有の文化を日本の方に楽しんでいただくのが、私たち伝統芸能のあるべき姿だと思っておりましたが、コロナを受けて3密はいけないとか、芸者衆という存在が必要ないというのをテレビを見ながらもすごく感じている中でしたが、昨年、一昨年か、2022年に1年間、一応アーティストビザというのを取って、アメリカのロサンゼルスで半年間ぐらい芸者を見てもらうイベントをやらせていただいております。

その中で一番強く感じたのが、やっぱり芸者の文化というのは日本固有の文化で、すごく海外の方々も知っている。名前をまず知ってもらっているのが、これはすごい強みだなと。例えば忍者だったり、侍だったり、芸者というのは、海外の方でもワードとしてみんな知っているんですよ。これが日本の文化というのも理解しているけど、忍者はもういないですし、侍ももちろんいない。唯一なりわいで残っているというのは芸者だけで、その芸者という文化を、ちゃんと正しいものを海外の方に見ていただくのは、すごく価値のあることだなと思っております。昨年ですか、戻ってきて、地元の、私たちは地元が品川で、さっき水辺の話があったんですけど、屋形船に乗りますと、それこそたくさん海外の方に来ていただきます。

川崎にも屋形船があるんですけど、海外の方が乗ることはあまりないというふうに聞いていて。私、毎月まつ乃家大宴会とあって、第144回やっているんですけど、いろんな日本の方とか、海外の方にも来ていただいて、芸者の文化を簡単に体験してもらおうというのをやっているんですが、今月2月18日には川崎の観光協会さんに協力していただいて、工場夜景と芸者と屋形船というのをイベントとして、やろうと思っております。

海外の方は屋形船に乗ろうと思うと、やっぱりお台場に行ったり、スカイツリーに行ったりして、もう何回も乗っているという方がいらっしゃる、3回目だとか、4回目だとか。例えばさっきまでスカイツリーに行っていたけど、また屋形船に乗ってスカイツリーに来たみたいの方もたくさんいらっしゃる中で、この工場夜景と芸者というのは、今まで屋形船の中ではコンテンツとしてあまりないんですよね。

何回も来て、リピートで来てくださる海外の方に向けて、これから新たな価値というか、新たなコンテンツをつくり出せるのは、川崎なんじゃないかなと私はすごく思っていて、今度2月18日には区の方にもご協力いただいて、海外のゲストを招待していただいて、アンケートをとってどう思いますかとか、私たちもそういう経験はないので、やっぱりこういう新しいコンテンツづくりには、海外の方の情報とか、地元の方々の意見とかを新たに受け入れながら、地元の方に喜んでもらえるコンテンツをつくっていかなくちゃいけないんだと。

ただ、売れるコンテンツだけをつくるのではなくて、地元の方にも喜んでもらえるコンテンツをやっつけていかなくちゃいけないなというふうに私は思っているので、2月18日には長八さんというところから屋形船を出ささせていただいて、工場夜景と芸者というのを1回ちょっとチャレンジしてみようということでやりますので、ぜひご興味があったら来ていただけたらうれしいなと思っております。

市長：めちゃくちゃ面白いですね。工場夜景と芸者、ありますよね。

中村さん、いかがですか。

中村さん：大島、すぐ近くが臨海部で、工場夜景、産業観光を見る会というところで、もうセミプロがガイドをしていますけれども、今、歴史ガイド協会に観光協会、H I Sを中心としたインバウンド、2月にモニター体験、そして3月から本格実施で通訳さんをつくるんですよ。私たちがいるガイド協会では語学が達者な方はそうはいませんので、通訳をつけて、大師方面、平間寺さんの中での体験、または周辺、そういうことを5時間、今お願いされていますので、インバウンドをやっぱり勉強しながら、うちのガイド協会もやっていきたいと思えます。

あともう1つ、栄太郎さんのすごくいいアイデア、また川崎にどんどん出てきてくれる、大井町、大森から、もう期待しています。

私は、大島劇場という、その目の前に住んでいまして、よく主人が、人力車でお披露目するときはちんどん屋を連れてお練りしていたそうです。そういう意味では、川崎は芸能もそうですけど、音楽も、ちんどん屋になりたいと私の子が言ったぐらいで、事実、今ちんどん屋をやっています。ちんどん屋といっても、音楽療法や小土呂橋でドラム教室をやったりして、「音楽のまち・かわさき」として介護事業所で頑張っています。そういう意味で、やっぱり子どもというのは地域で育ちますので、ぜひ、そういうのもっと広めていけたらと思えます。

余談ですけども、子どもたちにガイドするときに、みんなのまちの名前から自分を知ろうというと、学校の校歌だったり、川崎市歌だったり、その市歌に東海道面影いずこだとか、多摩川のとこ、見よ東（ひんがし）と、ひんがしというと東ということだよということ、ああ、そうか、川崎は北部、南部じゃなくて東、西、東西なんだねとか、やはり学ぶのは自分の地域からということを入れながらやっています。

この交流館でもガイドをしていますけれども、忍者の服を着たいとか、旅姿を着たいとか、やはり身近なところから、大いにそういった伝統文化、インバウンドを学びながらやっていきたいと思えます。話が長くなりました。

市長：いえいえ、ありがとうございます。

ちょっと栄太朗さんの関連から言うと、齋藤さんのホテル、来週9日オープンということですけども、オープニングか何かで栄太朗さんのお仲間が出るという。

齋藤さん：ほの佳さんに出演していただき、祝いの舞をやっていただこうと思っております。

うちのグループはもともとお米屋さんから始まっていて、その流れから日本酒をお米から作っていて、うちのホテルでも三角おむすびとかをコンセプトに考えているんです。先ほどのインバウンドのお話ともつながるんですけども、うちの作っている日本酒というのが結構海外で人気があるみたいで、そういったものを使って川崎に例えばビジネスとかで来ていらっしゃる方にも、ちょっと日本酒を楽しんでいただきたいなと思ひまして、うちはフリーフローで全て飲み放題みたいな感じでやらせていただくんですが。

自分ももともと鶴見出身なんです。一応横浜市民なんですけれども、川崎の方がやっぱり横浜より近くて、もう小さい頃からよく川崎に来ていたんですけども、ここ20年ぐらいで何か随分すごく変わったなと思って。小さい頃から見えていたこの川崎エリアは、結構大人のまちというか、自分が若かったのもあるんですけど、結構年齢層の高い方がすごく楽しんでいらっしゃるまちみたいなイメージがあったんですけど、今はチッタデッラやラゾーナさんができたりもして、若者もすごく多いです、海外からいらっしゃる方も結構飲んでいる人とかも見かけますし、何か大分雰囲気明るくなったなと思っています。

今回うちのホテルも川崎宿を題材にしていますので、川崎に何となく遊びに来ている人とかにも川崎の歴史を知ってほしいなと思って、何かできればなと思います。

市長：いや、うれしいですね。

これ、僕は区長から聞いたんですけど、区長が栄太朗さんをつないだという話。

齋藤さん：はい。ありがとうございます。

市長：ですよ。うまいコーディネートができたなという感じですよ。ありがとうございます。

齋藤さん：ありがとうございます。

市長：さっき豊田さんからご紹介がありましたけれども、岩澤さんのところも取材させていただいたということですが、岩澤さんは先ほど自己紹介でありましたけれども、切り子の体験とか、東海道ビールとかと、もう全面にやっていただいておりますけど、コメントをいただいてもよろしいですか。

岩澤さん：ありがとうございます。そうですね、栄太朗さんはうちのオープンがもう5年たっているんで、オープン記念から来ていただきまして、市長にも来ていただいたんですけども。先ほど中村さんからお話があったように、つい年末に1回、H I Sさんと川崎市さんでモニターツアーというものをやる中に、浮世絵ギャラリーさんと、東海道グラス、切り子教室を外国の人に楽しんでもらうというのを、先ほどあったように、この3時間とかの中で完結できるような、ちょっとでも川崎に、という。豊田さんから6割（外国の方が）泊まっていると言っていたんですけど、まちでそこまで見ないんですよ。

だから、まちに出てほしいという中の1つとして来てもらえるといいなと思ってやって、モニターツアーなので、アンケートを取ったらいいんですが、すごく好評だったということなので、そういうことでどんどんインバウンドも盛り上がるいいなと思っています。

市長：そうですね。いや、確かに本当にどこにいるんだろうという感じで、せっかく川崎に泊まっていたら、川崎をもっと知ってもらいたいですよね、地元とすれば。

岩澤さん：そうですね、京急さんが13分で川崎駅まで。京急の方、若干早くなって12分台だと自慢していただいたんですよ。だから、12分と言っていいのかなと思って、12分と私は言うようにしているんですけど。

市長：なるほど。

岩澤さん：12分何十秒だよと。

市長：じゃあ、これからは12分で統一していこうと。

岩澤さん：はい。お聞きしています。

市長：ありがとうございます。吉岡さん、いかがですか。

吉岡さん：メトロポリタンさんの6割（が外国の方）というお話を聞いて焦っているホテル緑道です。

そうですね、インバウンドはまだ川崎には来てくれるんじゃないかと思っていまして、インバウンド、観光客は外から川崎に来て、観光資源がないと地元の方は結構おっしゃるんですけど、僕は全然いっぱいあると思っていまして、地域の日常に触れることがすごく付加価値になるんじゃないかなと思っています。具体的には、地元の人が行っている居酒屋さんに行って、地元の人と交流できたら、それはめちゃくちゃ価値なので、また来たいと思うので、何かそういったご縁をいっぱい作りたいたいと思っています。今、地域主体でやらせていただいていることとしては、ホテル自体が道とついているので、ホテル前の通りを盛り上げようというのを、ホテルの地権者である山根工務店、あと隣のマンションの地権者の方とJAさん、稲毛神社さんと、まちなみ座談会という組織をつくって、どう盛り上げていくかという活動を、月1回ミーティングをしながらやっております。

そこで出たのが、僕も知らなかったんですけど、市役所前にグランドホテルというホテルが前にあったと伺っていまして、そのカフェでコーヒー寄席というのをやられていたというのを地域の先輩方から教えていただいて、それを地元の人がすごく楽しんでたというお話があって。濱館さんにもご協力いただきながら、今は春夏秋冬の年4回、区役所の寄席をやっている方を呼んで、縁道寄席という形で地域の方と一緒に、ドリンク代の500円ぐらいを頂きながらやっているんですけども、ちょっと和な感じのと、ちょうど小上がりが舞台になるので。柴太朗さんにも一度やっていただいたんですけども、非常に外国人に喜ばれるコンテンツかなと思っていまして、しかも、地域の人 coming という形なので、今は地域の方、最近20代の方とかも来られているので、行く行くは外国人の方も参加いただいて、地域の方とつながるものにしたかなと思っています。

ちょっと長くなって申し訳ないんですけど、さっきの品川宿の和田さんの「わいわい朝ご飯、晩ご飯」はすごく面白いなと思っていまして、何かそういう地元の人が集まるところに海外の方が来ると、日本食も経験できるし、つながりもできるので、そういったこともできたら面白いなと思ったんですけど、観光客の方も参加されたりとかはありますか。

和田さん：ありがとうございます。交流館が基本的にオープンが10時から16時までなんです。そうすると、実は地元の人が使え時間帯というのが開いていないということがあって、もうちょっと活用するために開きたいなというところの発想から来たのが、まず1つは「わいわい朝ご飯」、これは土曜日の朝やっていました。土曜日の朝、オープン前ですね、10時から交流館が開く前の時間を使って、開けて交流館を使っていく。かつ、土曜日の朝だったら案外地元の人には来やすいよねということで、朝ご飯をスタート。

「わいわい夜ご飯」の方は、ちょうど交流館の後ろに北浜公園という品川区で一番最初にやったプレパーク、子どもたちが遊ぶ場所があって、そこにお母さんたちもいて、でも、なかなかコミュニケーションが作りづらいということで、夕方5時以降に交流館を開けて、その時間を活用して地域の人たちが交流し合える場所をやりましょうと。

ここはいわゆる子ども食堂でもなく、誰でも食堂です。誰でも来てオーケーで、基本的にポットラック、持ち寄りでやり始めていました。なので、あまり飲食業は関係ないよねみたいところで、勝手に自分たちが買ってきて、食べたい物をあそこで食べていたら、何か人がいて、私の買ってきた物を食べているみたいなの、何かそういうふわっとしたものをやっていました。

その中で本当に誰でもオーケーというところで、特に事前の予約も必要ではありませんし、そういう中で、うちの近くにゲストハウスがあります。ゲストハウスは食事がついていないので、そのまの仲間とかが連れてきて、和田さん、今日誰か連れてきちゃってもいい？とか、連れてくる子どもたちはうわーとか、本当にギャーとかとなっているでしょう。うわーとかとなっているところに外国人が来て、何だここはみたいな状態だけど、その間にゲストハウスさんも入っていてくれるので、何となくその場が楽しんで終わっているという予定調和で、現状はそんな感じです。

なので、まだそこまでプログラム化してやっているわけではないですけど、確かに行き違う人たちの交流の場には現状なっている感じはあります。

市長：ありがとうございます。いや、吉岡さんのコメント、すてきだと思うんです。インバウンドの話もありますけれども、地元の人たちという視点をすごく大切にされるということは、みんな共通して思っていることだと思うんですけど、大切な視点だなと。

濱館さんが、それこそ寄席のどなたかをご紹介されたということですか。どういう関わり、そういうコーディネートも濱館さんがしてくれるんですか。

濱館さん：実は、吉岡さんは観光協会に加盟していただいています、私どもの施設は川崎市が建てた施設なんですけど、文化財団と観光協会が指定管理者になって、運営しているんですね。ですから、地域の観光発展だとか、そういう東海道を活かしたまちづくりに積極的に協力するというのが私たちの立場です。寄席をやりたいというお話を聞いたときに、ちょうどアマチュア寄席の方々がここを利用して、講演会もしょっちゅうで、今は大人気の施設なんです。

寄席の舞台は、金びょうぶとか、そういう捲りがあったりしますが、空いている時間であればお貸しできるということで、無料で提供してまちの活性化に活かしてもらおうと。

ついでに、ここで講演しているアマチュアの寄席の人たちにも話を通してご紹介をして、そこで縁道寄席がスタートしたという話になっています。はい、そんな形です。

市長：なるほど。さっき会場に入る前に、川崎市観光協会の青木さんから聞いたら、この寄席が大人気で、定数の倍以上が来るという。

濱舘さん：そうなんです。寄席と講談と、あと、江戸の粋に遊ぶ、まつ乃家さんの栄太朗さんもお出演いただいたことがあるんですが、いろんな芸能を紹介したりとか、いろんなことをやっております。有料であるものと無料であるものといろいろあるんですけど。

寄席は、かなりアマチュアの団体がありまして、そういう方たちにとって、使い勝手がいいんですね、安くてキャパがちょうどいいらしくて。アマチュア寄席の方は料金を取りませんので、市民の方は大挙して来られる。私どもの自主事業でも、プロのはなし家の方に来ていただくんですが、それも大人気ということになっています。

市長：ありがとうございます。ここでやっている寄席がホテルの方に飛び火をしてみると、いいコンテンツになっているということなんですね。ありがとうございます。

白熊会長、いかがですか。突然振ってあれですけど、地元でこういうふうなものが少し活性化してきているという現状について、少しコメントをいただけますでしょうか。

白熊さん：脱線しちゃったら止めてください。

自分は、和田さんのお話をお聞きして、私はもう80になるんですが、60年前ぐらいのことを思い出すんですよ。その頃は何をやっていたかということ、私も地元の人間で、祖父母の時代からずっとここに住んでいましたので、簡単に言えば、今、鬼塚さんとも一緒にやっております稲毛神社の山王祭というものがありまして、そこで非常に大きなおみこしが2台あったんです。それを出せなかったんですよ。

というのは、1回出したんですけども、人数が少なくなってきて、それで結局もう出せないような状況になってきまして、それで三輪車で運ぶ、本当に三輪車ですよ。三輪車の後ろにくっつけて、それで運んでいるという時代があったんです。我々も子どもの頃から、おじいちゃんたちがそういうふうに行っている姿を見ていて、これはどうしても出したいねということで始まって、それで青年会というものができたんです。

その頃には、まだ全国的にも青年会というものはあまりなくて、八坂神社とか、全国の有名なところの神社しかなかったんです。ところが、稲毛神社の青年会ということで行きましたら、君たちは何で来たんだと言うわけですよ。来ていらっしゃる方はみんな70代の方なんです。そこへ20代の者が行きましたら、場違いなんですよ。それでびっくりされまして、君たちは何をしにきたんだという話で、いろいろお話をしていたら、ああ、そういうことなのかということで、それで初代の会長が全国の副会長なんかをやるような形にもなったりして、結局、さっきお話しした城南なんか、深川や浅草も含めて、そういうところに行くような形になった。

だけど、最初の発端は、さっき和田さんもしきりに言っていたらいいよ、何となく集まって、何となくいろんな話をして、これは面白いね、これをやってみようよというところから全部始まっているんですよ。全くそこは同じなんです。

だから、人とのつながりをどういうふうにやったらいいかというのは、何か形をつくるんじゃなくて、目的があると、みんなが集まってくる。それは面白いな、俺は金なんか出せないけど、そういうふうな形で話をする仲間には行きたいなと。

あの頃は僕ら300円か500円で十分にお酒が飲めたんですよ。それで、とにかく銀柳街も盛んだったんですけども、その時代にそういうふうな話をすることによって、だんだん輪が広がって行って、最終的に登録人数が百何十名くらいにまでいったんですね。時代とともにだんだん年代層が上がってきました。

それで結果としては、どういう形になってきたのかということ、その頃にやっていた青年会の幹部だった者が今度は町会に戻って、要するに町会の副会長をやったり。私とあともう1人は、鬼塚さんもそう

ですけれど、結局そういう子どもの頃からの続きがあって、それは多分、品川宿の堀江さんも、お話を聞いたらそうだと思うんですね。地元の中でやってきたから、非常に楽しかった思い出があるから、何とか子どもにつなげていきたい。

私どもは今、この川崎区の中央ですと23町内会がありますけれども、町内会の会長さんたちとお話をするときでも全部同じで、本当にどうやったらば次の世代につなげていけるのか、どうやったらば子どもたちが楽しくやれるのか。

それで、鬼塚さんとしょっちゅう話しているのは何かというと、本当に乳飲み子を抱えたお母さんから、おじいちゃん、おばあちゃんまで、ああ、やっていてよかったねと言われるというのは、それから町会にとって、その収入が例えば100あったとしたら、そのうちの半分、場合によっては半分以上になるぐらいの予算を使ってやっていけているという事業というのは、お祭りなんですよ。

結局、さっき言ったお話と同じです。ウェルカムですよ。誰が来てもいいんです。うちの町会なんか、去年の話なんですけど、インド人の方が30人ぐらい来られたんですよ。面白いですよ。30人来られると何か景色が変わるんですよ。一応彼らにしてみれば、運動靴でいいのかとか、短パンでいいのか、Tシャツでいいのかという、そういう話もあって、それも全部、地元のお祭りのときには、それこそ地元の町会長を含めて、その幹部の方がオーケーだったら、それで楽しいよと。

皆さんもご存じだと思いますけど、インド協会の方なんかもらっしやって、それで今年はまた増えるでしょうね。そうすると、先ほど言っていたらしゃったインバウンドなんかは全く違う世界なんですけど、何か地元というんな方がウェルカムでやっていく。我々が地元に貢献できるのは、本当に一番下の乳飲み子から、ずっと誰にでも楽しめるような雰囲気のものというのは、我々にとってはお祭りだったんです。私の子どもの頃から。

初めて大人の人と一緒にいるときに、頭のところにおしろいで「の」の字を書いてもらって、それがうれしくて、大人の仲間入りができたみたいな雰囲気があって。おじいちゃん、おばあちゃんたちに怒られたり、それこそ生のキュウリを塩でぎゅっともんでくれて、それをもらえたことがご褒美だったり。

市長：会長、ありがとうございます。すごく年齢を感じさせない若々しいお話ですけれども、60年前に和田さんのところのような会ができていたと。それが1周してきて、もう1回まさに乳飲み子からというぐらいの若い人たちというようなものが活性化してくる、もう1回やりたいよねというようなお話……。

白熊さん：鬼塚さんとしょっちゅう言っているのは、もう地元の町会の中から、地元の方からいろんな声が出てきたなら、これはやっぱり俺たちがやらないわけにいかないよねという話で、今回たまたま100周年がございませうね。

だから、そのときにもう本当にもう熱くなって、それこそ多いときには月に2回とか3回、またご一緒させていただいているんな話をするんですけど、そうすると、地元の町会のいろんな悩みとか、それから、いろんな良いところとか、それをお互いに吸収し合って、それで結局、今のあの形がありますし、だから、それこそ成沢さんとか、もう皆さんにも言いたいことばかりを言って、市の方にもご協力をいただいているという。

市長：木村会長にも少し地元の意見をいただいてもいいですか。

木村さん：今皆さんのお話を、すごく感動をしながら聞いていたんですけども、もともと私は川崎の住民じゃないんですね。外から来まして、ちょうど50年ぐらい前に結婚するときに、六郷土手のほうに住んでいまして、大体日曜日になると、こちらに妻と一緒に商店街を歩いて買物して帰っていたんです。

そんなに東海道自体をよく知っているわけじゃないんですけども、このプロジェクトに参加するようになってからいろいろ考えまして、東海道自体はその当時は旧東海道と言って、横には自動車の東海道があって、それから鉄道があるわけですね、京浜急行、JRと。そうすると、歩くのは東海道で歩いているんだから、私はこれは旧じゃなくて、やっぱり今までどおりの東海道じゃないか、だから400年をお祝いするんじゃないかと思うようになったんです。だから、旧東海道400年のお祭りじゃなくて、東海道の400年だから今もあるんだというふうに思い至っています。

不思議と川崎は人口がまだまだ増えていますね。そうすると、増えていく中で一体川崎の東海道自体が、旧じゃなくて新しい東海道の見方をしていけないといけない。川崎も、私にとってみたら第二の故郷なんですね。川崎宿を第二の故郷にして、川崎を新しい故郷に、そういう気持ちが非常に強いです。だから、新しいことをやるにしても、古い歴史を発掘して、新しいものをやっている。歴史の中にはこの20年間で三角おむすびとか、それから渡し場とか、松の木も。創生でもってやったのが中間灯です。なかったものを新しく作って、東海道の目玉にしたと。

そうすると、今から、この20年だけじゃなくて、100年、200年になっているときには、やはりみんながもう1回新しい志を持ってやっていくことが一番大事じゃないかなと思っております。

市長：ありがとうございます。今、中間灯の話だと、もともとなかったものをまた新しく作り出していくというふうなお話をいただきました。

<市長との意見交換②>

市長：時間が大分迫ってきたので、まだお話いただいていない方もいらっしゃいますけれども、次、テーマ②を出してもらっていいですか。

今までいろんなところで、もう既につながっている方もいますけれども、もっと面としてというか、先ほど和田さんからご紹介があったように、人同士でつながっている線みたいなのを、どうやって面にしていくかというのは、とても大事だと思うんですね。そうするためには、どうしていったらいいかということ、少し皆さんからご意見をいただけないかなと思いますけれども、いかがでしょう。

濱舘さん、いかがですか。

濱舘さん：私は川崎区生まれの川崎区育ちでずっと生きてきましたので、これから川崎をもっとよくするためには、私の思いとしてはまず駅前の環境をもうちょっときれいにできかなと。京急の駅前から降りてきて、何となくごちゃごちゃとしていて、朝なんかはちょっとごみが散乱していたり、カラスが大分活躍していたりするところもありますので、そういうところにもうちょっと目を向けて、地域全体でもうちょっとまちの環境なりをまずきれいにさせていただける、そういうことをさせていただくのがいいなと。

せっかく中間灯がついて、ここが川崎宿、東海道なんだというのは一目でも分かるようになりましたので、そういうものを活かして、商業の方だとか、いろんな方が多分、活躍していただけるようになると思います。そういう中で、やっぱりいろんな美味しい物を川崎での中で食べられるようなお店がいっぱい増えるのがうれしいですし、そういう魅力あるまちをみんなで作ってあげればいいかな。まずはきれいにしてもらいたいなというのがあります。

市長：嵯峨野さん、すみません。取組を広げていくために、面をつくっていく仕掛けみたいなものはあると思いますか。

嵯峨野さん：そうですね、冒頭にもお話ししましたがけれども、私ども金融機関というところで一体何ができ

るのかなと常に模索はしています。ご一緒させていただいたりとか、預金を集めたりとか、そういったところ以外の取組、どんなことがいいのかなというふうに考えているんですけども、今回のテーマである東海道の川崎宿というところで、私ども1つやらせていただいていることが今ございまして、三角おむすびをモチーフとした、当時、義宗公が来たときに、おむすびと言われるものが、おもてなし等々で大変好評だったというふうにお話を伺っています。

その三角おむすびをモチーフとしました、信用金庫のキャラクターというものを昨年つくらせていただきまして、私どものいろんなポスターですとか、カレンダーなどに掲載をさせていただいております。

今お話させていただきましたとおり、おむすびを通じて、この東海道というものが広まっていければいいなと思いますし、川崎区内の小中学校、多くの方々に学校の諸経費の支払いとかで口座もつくっていただいておりますから、そういう方に東海道にまつわるうちのキャラクターを目にさせていただくことで、こんな歴史があるんだなということを分かっただけであれば、東海道に対する誇りというものも、皆さんに持っていただけるんじゃないかなと思います。

そこには川崎宿周辺と書いてはいますけれども、市内全域でそういった取組、私どものほうで微力ですけれども、そんな広がりをもてればいいかなというような形で今は考えてはおります。

市長：ありがとうございます。本当に三角おむすびがそういう形に発展したかということもありますし、冒頭にご紹介いただいたように、シャッターのところに浮世絵を描いていただいたりと、まちづくりに貢献をいただいているということでもあります。

木村さん：市長さん、1つだけよろしいですか。

市長：はい。どうぞ、木村さん。

木村さん：短めにします。品川宿のほうにお祭りに何回か行って、それから、銀座もよく行くんです。どっちにも共通しているのは、歩行者天国なんですよ。

東海道をもっとにぎわいをもって、それから一体化してエリアを全部つなぐということであれば、思い切って歩行者天国を1回やっていただけないですかね。それを推進していただくということが、多分みんなの行動だけじゃなくて、心も一体化して。今は中間灯がついているだけでも、店の形が変わってきているんです。昔の形に戻そう。これが歩行者天国になってくると、恐らくここがにぎわいの中心になってくると思います。年に1回から始めていただくということを、ここでせっかく出たんですから、考えていただくとありがたいです。

市長：ありがとうございます。昨年の秋、「みんなの川崎祭」という形で川崎市役所の前を初めて封鎖して、片側だけでしたけれども、お祭りのようなことをやらせていただきました。あのことも、やはり市政100周年のレガシーにもなるんじゃないかなと思っていて、もう少し公共空間をうまく使っていきたいということ、今、川崎市でも取り組んでいます。

歩行者天国は、実は警察協議がすごく難しいんですよ。バスをどういうふうに迂回してもらうとか、また地元の方たちの理解がすごく大切なので、そこは本当に丁寧にやらないと大変なことになっちゃうんですけども、道路も含めた公共空間をうまく使うというのはとても大切なことだと思うので、しっかり受け止めさせていただきたいと思います。

さあ、ちょっと和田さんから、さっきの運営委員会のお話で、毎月1回ああいう場があるというところで、みんなが集まって、新しい若い人たちもわちゃわちゃとやってくるというふうなものが、やっぱ

り常に新しいアイデアとか取組というのをうまく仕掛けていくという、そういうポイントになっているということですかね。

和田さん：そうですね。会長も含めてですけど、宿場というところはもともと人が集まってこその場所だというのを品川宿の人間はすごく自覚しています。風土という言葉のとおり、風の人、あと土の地元の人が出て、ここがまじり合うことで発展しているのがやはり宿場という場所のポテンシャルですので、それを活かすという意味では、モットーとしてはとにかく新しいものを受け入れる、循環させていかないと自分たちの首が絞まるとも言えるんですけど。

ちょっと話がずれますけど、交流館ができた頃、交流館の誰が土曜日をやるかどうかの話をする、運営委員会の出席者が減るといふ……。だんだん苦痛になってきて出たくないなど、こういう事態に。当然まちづくりを狭い中でやっていると、あつれきというか、出てくると。それを解除するためにやっぱりどんどん新しい人を入れて、出ることによってメリットみたいなものを、まちの中でつくっていく必要性というはあるよねという意味では、本当に新しい人たちを入れているというのがあります。

市長：そういう何か循環みたいなものはすごく大事ですよ。オープンであるべきだし、誰でも入れるし、誰でも発言できて、どこかにつながれるというふうな機能ですよ。

先ほど皆さんそれぞれにつながっているところというのは、どううまくやればいいのかなというふうに思うんですけども、山根さん、何かアイデアはないですかね。

というか、山根さんは地元でも百何十年も続く企業であると同時に、川崎の青年会議所の理事長も経験されていて、地域を巻き込むという形ではすごく日々活躍されておりますけれども。

山根さん：青年会議所はもう強制力のみでした。あまり自由活発などというのはなかったですけど、ちょっと近いところではかわさき未来塾というのを組織してまして、それは規約も何もなく、ただ、川崎の未来を考えていこうみたいな会があるんですけども、やっぱり自由なんですよ。

コロナでちょっと我々はお休みしてしまったんですけども、その会も毎回毎回、新しい人をどんどん入れて、今メンバーでは50名ぐらいいますかね。

毎年増えていって、活発化して、ただ目的がちょっとあやふや過ぎて、例えば川崎宿を盛り上げていくために何をしていけばいいのかといった、今はそういうテーマがないものですから、ある程度テーマを加えてやれば、それに近いものができるのかなと、今お話を聞いていて思いました。

面でというお話があったんですけども、どっちかという、川崎は通りをあまり大事にしてこなかったんじゃないかなというところも感じるんですね。例えば、横浜の馬車道とかがありますよね。馬車道ですと、地区協定がしっかり決まっています、新しい建築物を建てる時に30%は商業施設を入れないといけないんですね。川崎でそういった場所は1つもないんですよ。ある意味で開発が自由で、都市計画が自由で、だから人口も増えたんだと思うんですけども、マンションとかはすごく建てやすく、高度利用はすごくしやすいんですけども、ただ、そういった1、2階が何であっても、例えば店舗をつくらなくても造れるエリアなものですから、分譲マンションとかは非常にたくさんあるんですが、そういった商業施設が加わったような建物はものすごく少ないんですね。だから、そういったある意味で規制ではないんですが、自由過ぎて取っ散らかっちゃうみたいな、そこが少しもったいないのかなと。

地区計画をつくるには、歩行者天国と一緒に、住民の方の総意が必要ですから、なかなかできないんですけども、例えば、事業者に対して建物を建てる時に、インセンティブとして、もっと高度利用ができますよと。商業施設を入れれば、よりその容積を緩和しますよみたいな、これは行政も1円もお金はかからないですし、逆に固定資産税も増えますし、損する人はいないんじゃないかなと思うんです

ね。だから、こういった取組をぜひ行政の方でもしていただいて、そのまちが栄える。やっぱりまちづくりは1階からだと思うんですよ。1階が店舗じゃないと、そのまちは本当に死んでいってしまう、死んでいくという言い方はよくないんですけども、やはり通りに人が増えたり、そういったものを大事にしていくには、行政さんの取組も大事なんじゃないかなと。

市長：いいご意見ですね。確かに、1階の路面のところは商業かどうかというのは、とても重要な視点だと思います。特に東海道みたいなのは、ずっと店舗があるのか、ないかというのでは、えらく違ってきますので。

山根さん：そうなんです。エリアで規制を張られてしまうんですけど、例えば東海道の通りは容積率で言うと500%という緩和はあるんですが、何をしてもいいんですよ。容積が自由になって、分譲業者にとっては売れる面積が増えるからラッキーみたいな。1階はエントランスでいいんですよ。でも、裏通りだったらそれはあり得るんですけども、表通りに関してはこういった規制をする、もしくは、それプラス、インセンティブを与えるということで、開発業者も考えるんじゃないかなと思いますので、ぜひこういった取組をお願いしたいなと思います。

市長：ありがとうございます。こういうふうな話も、そういうものが必要だよねという、山根さんの声ということじゃなくて、やっぱりまちづくりをやっていくためには、こういうルールづくりは必要だよねというような、そういう合意形成をする場というのも大事なんじゃないかなと、今のご意見を聞いて、本当にそうだなと思いました。ありがとうございます。

ちょっと元沢会長に聞きたいんですけど、京急川崎、これから新しいアリーナができるという意味では、東海道の川崎宿ということだけじゃなくて、もう少し広がりを持った面の連携というのがすごく大事だと思うんですけども、これについてかなり大きな核になってくるだろうと思いますが、新しいアリーナのことも含めて少しコメントをいただいてもよろしいでしょうか。

元沢さん：はい。5年弱後ぐらいですかね、2028年に向けていろいろ準備しているんですけども、バスケットだけでなく、いろんなイベントをやろうと。最大収容1万5,000人のアリーナになりますので、多くの人に来てくれると思います。それこそインバウンドの方もいらっしやると思います。

それで、アリーナの中で楽しんで帰ってしまうのは非常にもったいない。違うところに泊まってしまうのはもったいないと思うので、アリーナに来てくれる1万人のお客さんが、その前、ないしは後にどれだけ川崎のまちに出て、もう半日、一日、できればもう数日泊まって、日をまたいで楽しんでもらうかと、この仕組みはものすごく大事だと思っています。

一見アリーナには関係ないかもしれないですけども、あのアリーナに行くと面白いよねというお客さんの体験になるので、これは僕らとしてもすごく大事だと思っていて、今日の話でも、実はいろんな観光資源というか、面白いコンテンツは本当いっぱいあるなと。

もちろん川崎大師という象徴もあれば、先ほど吉岡さんとかも言っていた、ちょっとした地元の人気のお店、日本は本当に食べ物が美味しいですから、いろんな見るところ、食べる場所、実はいっぱいあると思っています。それをどうつないでいくか、アリーナに来た人にどう川崎を回遊させるかという仕組みは、ぜひ皆さんとつくれたらなと思っていて、これは多分いろいろソフト面で、そういう回遊するイベントというか取組を、アリーナができるまで5年間ぐらいあるので、僕らもできるだけ人手も出して、皆さんと一緒に、多少失敗してもいいと思うんですけど、トライアルをこれからどんどんやっていくことが大事なんじゃないかなと。

アリーナを見る前に川崎大師までこの旧東海道を歩いて行って、歩いて帰って、1時間ちょっとぐら
いすかね、もうちょっとかかるかな、片道1時間はかからないですかね、40分。だとしたら、すごく
いい運動になるというか。その後にアリーナでバスケットボールの試合を見て、その後にまちに出て、
1杯飲んで帰ってもらいたいな、その仕組みをぜひ、ちょっと僕らも頑張って4年くらいかけて皆さ
んと一緒にリードしていきたいなというのは思いました。

市長：ありがとうございます。本当に元沢会長は地元のことをすごく見てくれているというか、大事にして
くれているので、ありがたいなと思うんですけども、新しいアリーナができるけど、アリーナの中で
収まらないというか、その周辺を含めて、いろんなコンテンツをつくっていこうというお話だと思いま
す。

岩澤さん、改めてですけども、昨年ですね、多摩川の。

岩澤さん：六郷の。

市長：そう、六郷のところから船を出してというのを私も参加させていただきましたけど、あれも新しいコ
ンテンツですよ。少し面的に広がっているという思いをしたんですけども、何か思いも含めてちょ
っとお話しいただいてもいいですか。それだけにこだわらなくてもいいんですけども。

岩澤さん：去年、鬼塚会長の400年のほうの取組として、六郷橋のたもと、旧六郷の渡しのところを利用
した「六郷渡場フェス」という祭りをやったんですが、約1万人の人が来てくれて、そのうちほぼ8割、
9割、自転車も含めると9割じゃきかないのかな、東海道を通過して水辺まで来たんですよ。だから、
それを知らなかった人も、何で今日はこの通りを人がすごく歩いているんだろうと。しかも片側だけじ
ゃなくて、帰ってくる人もいるので、両側を通行していると。

イベントをやって食事とかも出しているんですけど、わざと川のほうを向けて椅子を並べたんですよ。
5人で来て円にならずに、水辺のほうを向いたままビールを飲んだりホットドッグを食べたりと。これ
を見たときに、向きを変えない。変えられる椅子なのに変えないというのは、やっぱり水辺の効果はす
ごく魅力なんだなと。

元沢さんの新アリーナ計画は、そのまま多摩川の水辺まで出られるというふうに考えていただいでい
て、前にもお聞きしたんですけど、自分は子どもが3人いるので、子育て世代として欲しかったもの、
川崎に足りないと思うのは公園で、目の前に六郷の水辺があるのに整備されていないので、
そこにかみさんと子どもで行ってこいとは言いつらい場所だったのが、このアリーナ計画が進むと、つ
いに完成するんじゃないかなというわくわくが本当であって、これが山根さんとかも言っている回遊性
とかにもつながる、すごくここからの5年というのが期待でわくわくしています。

市長：ありがとうございます。

そういう意味では、多摩川もうまく使くと、すごく魅力的なコンテンツが幾つも生まれる。さっき栄
太朗さんの長八を使って、工場夜景と芸者文化をつなぐとかという、もう無数のコンテンツができる、
むしろつくっていかなくちゃいけないというふうに思うんですよ。

繰り返しになりますけど、そういうことを線じゃなくてやっぱり面でやっていく、いろんなアイデア
が放り込める。そして、どこどこがつながるといような、和田さんからご紹介いただいたような、
ああいう場ができると思うんですけど、いかがですかね。僕はこんなこと
をやりたいんだけど、どうしたらいいのかわからないけどみたいな。どうぞ。

佐々木さん：今、市長からもあったんですけど、和田さんのお話を聞いて私はすごく感銘を受けたというか、地域と大きなボランティア団体みたいなお話があったかと思うんですけど、やっぱり会社の中で、何でもこういうエリアマネジャー、地域連携みたいなことをやっているのかと、結構言われることが多かったんですけど、だんだんそれがまちの価値を上げていくことが自分たちのメリットにもなってくるという、まずそこからというふうに思っていたところで、全然その先を行かれている取組だなというふうに思って、ぜひ今度勉強に伺いたいなと思ったんですけど、その意味で、せっかく今日これだけ集まって、多分、まだ皆さん話し足りないんじゃないかなという雰囲気もちょっとあって、すごくいい意見だったり、私も本当に勉強になることばかりだったので、せっかくならこの枠組みで、何かみんなで、さっきのインバウンドもそうですし、この面で広げていく取組みたいなものを話し合う場だったりとかに発展していけるとすごくいいのかなと、何かそういう機会とかが今後つくれたらいいなと思いました。

これはなぜかという、川崎市さん、私たちもいろんな自治体さんとお付き合いをしているんですけど、川崎市さんは本当にスピード感がすごくあるなと思ったことが去年もありまして、大師公園の活用のところでは建設緑政局さんからもお声がけいただいて、ワークショップをやるから来てみてよと言われて行ったら、2回ぐらいやったら、もう実行委員会になって、去年、私も大師公園に泊まったりとか、公園の活用というものをやった機会があって、そこで結構ネットワークが広がったりというものがあつたんです。今日もすごくいい機会だったので、何かこの枠組みで、みんなで、じゃあ、外国人を呼んでみようとか、さっきちょっと京急の駅前が汚いというお話もあつたので、頑張らなきゃいけないなと思ったんですけど、そういう活動をやってみようとか、何かそんなふうに広げていけると、今日は来て本当によかったなと思えるのかなと思ったので、そんなこともちょっとできるといいかなと、どうでしょうという感じです。

市長：いいですね。岩澤さん、どうですか。

岩澤さん：すみません、何度も。京急さんは大師鉄道から始まったということもあると思いますし、ぜひアリーナとともに西口開発というのを。自分も説明会に行かせていただいたんですが、すごくこれからは楽しみだと思えます。

さっきちょっと言いそびれて、私もこれからやりたいなということでは、六郷の渡場フェス、祭りをやったときに船を出したんですよね、羽田のところまで行く。私が子どものときは、ボートを預けるボート屋さんが橋のたもとに2軒あって、あれは違法だからなくなったのかなと今は思うんですけど、ちゃんとした許可を取ってやれば、栄太朗さんの今度やる夜景ツアーも、東海道を歩いて六郷橋のところから船が出るなんて、すごくまた楽しくて、振り返ると新アリーナが見える。何かもうすごく楽しくなってくるなというのがあるので、ぜひ行政の方と一緒にそういう計画を立てられないかなと思いました。

市長：ありがとうございます。やっぱりコンテンツをつくっていくのもそうですし、情報が共有できる場があつたら本当にうれしいなと思えます。

行政がやるべき話というのものもあるでしょうし、民民でやる話というふうなものも次々と生まれてくるような、そういったプラットフォームがあるといいかなと思うんですよね。

ですから、鬼塚会長、400年は一応、400年という形ではあれ（完結）しますけれども、これからもまた続けていくというか、さらにレベルアップして、若い人たちも先ほどおっしゃったように、どんどん入ってくるというふうなことをしていくべきだと思うんですが、いかがでしょうか。

鬼塚さん：400年プロジェクトも終わりではなくて、今年からは、またそれを延々と広報していく。それ

にはやっぱり若手、また今までと替わったメンバーもどんどん取り入れて、もう黙々と進んでいくしかないですね。それでもって、先ほどから言っている川崎が線じゃなくて面に広がっていけば、なおさらいいと思っております。

市長：ありがとうございます。区長、今までのところでいかがですかね。

区長：先ほどコンテンツの話のところ、栄太朗さんを紹介してみたいな話がありましたが、実は栄太朗さんは、岩澤さんから私にご紹介を受けたんです。観光行政にもいたんですけども、そこでのつながりよりも、川崎区に来てからのほうがよほどつながる機会が多くて、栄太朗さんは観光行政のほうにつながいで、それが長八につながったりとか、小さいことが本当に大きくなっていくということで、皆さんやっぱりこの場というのは、これからちょっとどうやってやるかというのはまた皆さんと話していきたいと思えますけれども、今日に限らず継続して、皆さんと語っていききたいと思うんですよね。

市長：そうですね。だから、こういう場があって、先ほどの運営協議会じゃないですけど、どんな名前でもいいんですが、そういう誰でも入ってこられるようなところ、先ほどの例えば、長八さんも来ていただきましょうよという話だとか、いろんな地元の方も含めて、ステークホルダーがここにわちゃわちゃと来ると。こんなことやりたいということが提案できてつながるとい、そういう場があるといいなと思うんですけど、濱館さん、ここ交流館がせっかくあるので、ぜひ。

濱館さん：交流館は10年前にできたのですが、やはり地域の方々の東海道川崎宿を生かした歴史と文化を学べる施設が欲しいんだということでできたところとして、歴史と文化を学ぶともに、市民の地域活動の交流の場という位置づけもありますので、そういう部分ではどんどん活用していただければありがたいかなというふうに思います。

市長：これを定例化したら、そういうものにも使えるんですか。

濱館さん：そこは、今までのシステムと変えなきゃいけない部分、出入口の問題だとか、場所の問題もありますので、ここは有料で貸している施設で、12月29日から1月3日までは休みですが、月曜を休館日と言いつつも4階はずっと貸しっぱなしなんですね。常にお客様が来ているような状況ですので、そこをどううまく再整備するのか、それから人の問題だとか、費用の問題とか、そこら辺をちょっと解決する必要があるのかなというふうに思います。

市長：ありがとうございます。場の問題もありますし、どういう形にしていくかというのは、ぜひ今回の車をきっかけにそういう場を、プラットフォームをつくっていくということにつながればいいなと思います。皆さんとご相談しながらですけども、そういう形をつくっていければいいなと思います。ぜひ、交流館もご協力をいただければと思います。

さあ、時間になってしまいましたので、この辺りにさせていただきますと思いますが、あえて最後に言っておきたいという方がいらっしゃいましたら。

はい、どうぞ、中村さん。

中村さん：川崎の新市庁舎はもう本当に観光スポットです。まちの人や子どもたちを案内すると、わあ、すごいと。多摩川の流れ、それから工場地帯、あの360度を観光スポットとしてガイドの中に入れてい

きたいなと思っています。

それと西口のデルタ、メトロポリタンの周りで電車を見る子どもたち、また親子。西口の工業発展、そういうところも歴史ガイド協会として今は捉えて、市電で歩く川崎とか、鉄道のほうも力を入れていて、そういう意味でも、新庁舎を案内すると川崎はすごいと、そういう感想をもらっています。横浜は上に行けないけど、川崎は上まで行けるとい、そういう感想をもらっています。

失礼しました。

市長：ありがとうございました。25階の展望フロア、夜、市役所にカップルが来ているという、非常にうれしいスポットになっていて、ですから、通りを大切にするというふうなお話、山根さんからもありましたけれども、通りもそうですし、面もどうやって活性化していくかということ、こういう、これから始まる新しい、プラットフォームなのかはあれですけども、そういう形をつくっていけば、もっともっというろんな無限のコンテンツが出てきて、もっと川崎は伸び代がたくさんあるなど思わせていただきました。本当に参考にさせていただきたいと思います。

品川宿の和田さんにも、皆さん、拍手をお送りいただければと思います。そして、今日ご参加いただいたそれぞれ皆さんに拍手を送りたいと思います。ありがとうございました。

司会：ありがとうございました。まだまだご意見が尽きないかと思えますけれども、お時間になりましたので、以上をもちまして、車座集会は終了とさせていただきますと思います。

本日は、ご参加いただきまして誠にありがとうございました。これをもちまして閉会とさせていただきます。